

第4週

質問9. 人が実行することのできない律法を守るように求めるとは、神は人に対して不正を犯しているのではありませんか。

答え I 決してそうではありません。神は人が律法を守れるように造られました。⁰¹しかし人が悪魔にそそのかされて、⁰²意図的な不従順によって、⁰³自分自身と自分のすべての子孫から（律法を守れる能力者）神の賜物を剥奪してしまいました。⁰⁴

① すでに、前の質問（6番）の答えを通して、神は人間を造られる時、力を付与なさったことを述べました。そして人間をご自身の形に造られる時、戒めを守れるように能力を与えました。そして戒めを遂行するように人間に要求しました。しかし人間が悪魔にそそのかされて、意図的な不従順をしたことによって、自分だけでなく、自分のすべての子孫たちにも、また、戒めを守れる力をも失わしてしまいました。従って、人間自ら、自分を悲惨にさせた責任を神に投げ渡すことはできません。人間の無能は神の責任ではないからです（質問7番にて、これについてすでに調べました）。

② 勿論、罪人が善を行える力がないと言うのが、自由意志事態を喪失した

01 創世記 1:31、エペソ 4:24.

02 創世記 3:13、ヨハネ 8:44、I テモテ 2:13-14.

03 創世記 3:6

04 ロマ 5:12, 18-19.

と言う意味ではありません。ただ、罪によって、徳と言える聖なる自由意志を失ってしまったのです。そしてその自由意志は、罪と悪を行おうとし、良いことは全然行うことができません。意志が罪の奴隷になった状態です（ヨハネ 8:34、36）。従って、意志が罪から解放されなければなりません。また、罪人の理解力は完全に暗くなって、正しいことは見られず、悪いことに偏っているので、そこから楽しみを取り込みます。罪人は不義を行いながら喜びを得ます（Ⅱテサロニケ 2:12）。そういうわけで、やはり善を行うことはできないのです（ヨハネ 8:44）。

③ そうだとすれば、神は現在、人間たちが神の律法を完全に守ることができないのを知っておられるのに（ロマ 3:20）、守るように要求なさる理由は何故ですか。それは、神の聖さと不変性によるものです。神が律法を守るように要求なさるのは、公義がその中にあるからです。人間がまして守れないと言っても神は人間に公義を要求します。最も、新生していない者にとっての律法は、特別な機能をするから、神は彼らに律法を守ることを要求します。⁰⁵

新生していない者たちは具体的に二種類と別れます。選ばれた罪人 *elect sinners* と、遺棄された者 *reprobates* です。律法は選ばれた罪人には、彼らに罪を悟らせ、自分たちの悲惨さを知るようにさせ、キリストに走るようにさせる機能を持っています。しかし遺棄された者たちにとっての律法は、彼らがますます悪にならないように制御させる機能をし、結果的に人間社会が悪に完全に破産するところまで行かないように止めさせます。

また律法は、神が遺棄された者たちを審判なさる時、彼らが罪に定められるのが当然な根拠として提示されるでしょう。それゆえ、人間たちが律法を完全に守れないにも関わらず、神は守ることを要求するのです。

05 新生している者にとって律法は、信仰告白書、第 44 週で言及しています。

④ 一方で、新生すれば律法を完全に守れるのかという質問が出て来ます。そうではありません。新生したとしても相当な部分はやはり善を行うことはできません（ヨハネ 6:5、Ⅱコリント 3:5）。ここでは、新生していない者の無能と、新生している者の無能とが区別されるべきです。新生していない自然な人は、罪の状態によって死んでいます。従って、必ず新生しなければならないのです。しかし新生した者は、霊的に目覚めたので、恵みの影響によって霊的生活が進展されなければならない状態です。それで新生した者は、善を追い求めようとする性向が植えられているけれど、やはり神の恵みと、キリストが与えてくださる力によって善を行うことができるのです（ピリピ 4:13）。つまり、新生した者は、いつも神の恵みの影響の下で、善を行うことができます。

質問 10. 神はそのような人間の不従順と背反とを罰せずに見逃されるのですか。

答え I 断じてそうではありません。神は私たちの原罪は勿論、私たちの自犯罪（实际的罪）を酷く嫌います。従って神は、公正な審判によって、それらを現在から、そして永遠まで処罰なさるでしょう。⁰¹ 神はガラテヤ書 3 章 10 節で、次のように宣言されました。「というのは、律法の行いによる人々はすべて、のろいのもとにあるからです。こう書いてあります。律法の書に書いてある、すべてのことを堅く守って実行しなければ、だれでもみな、のろわれる。」⁰²

① 神は罪を酷く嫌うから審判なさいます（申 27:26、ガラテヤ 3:10）。神が罪に対して審判なさるのは、必ず必要なことですが、罪が、神の聖、義、権威に対

01 出 34:7、詩 5:4-6, 7:10、ナホム 1:2、ロマ 1:18、5:12、エペソ 5:6、ヘブル 9:27.

02 申命記 27:26.

して挑戦することだからです。神はその聖さと反対なるすべてを審判なさいます。また神は、その正義のゆえに悪を審判なさいます。

神は公正な審判によって罪人たちを処罰なさいます。その審判の中には、この世において一時的な審判がありますが、肉体的なものと霊的なものがあります。肉体的に受ける審判は、罪人に恥ずかしく、痛みと苦しみなどです。神は罪を犯した者たちに、時には、貧困によって処罰されたり（ホセア 5:12）、肉体的な病気によって打たれたりします（ヨブ 18:14, 18）。

霊的には、この地にあつて審判する道具などは、罪人たちに霊的な目がふさがれるようにさせ、闇の中に閉じ込め（ロマ 2:21）、罪人たちの心を頑なにさせ悔い改めないようにします（イザヤ 6:9-10）。また罪人たちを、彼らの情欲に支配された状態のまま引き渡し、これもやはり神の審判です（ロマ 1:28）。神の審判の方法として、時には、罪人がサタンの支配下にいるように引き渡したりも（Iサムエル 16:14）、終わりのない良心の不安に陥らせ、苦痛を与えたりもします（マタイ 27:5）。

神の審判は、この地において一時的なものだけで終わりません。永遠に消えない火の審判があつて（ユダ 1:7）、地獄の審判があります（マタイ 23:33）。罪人と犯罪者たちは、一番、恐ろしい場所に投げ落とされ（Iペテロ 3:19、ルカ 16:23）、暗い所で泣き叫び、歯ぎしりするようになるでしょう（マタイ 25:41, 46）

② 原罪についても審判されます。アルミニウス主義者は、原罪はアダムの罪だから私たちには該当されないと主張します。ソツツイーニ主義者も神の審判教理を否定します。しかし原罪は、私たちに腐敗として遺伝されているので、神が公正に自犯罪と共に審判なさいます（イザヤ 48:8）。悪い性向が私たちにまで伝わって来たので、悪い欲望などがやはり私たちの中にあります（エペソ 2:3、ロマ 5:14）。そしてこれは、実際的な罪です。

従つて原罪を否定するペラギウス主義、アルミニウス主義は、罪と罪性のすさまじさに対して無知だからです。このような思想は、結局、恵みを弱化させ、

新生の御業を必要ないこととして転落させ、一方、人間の自由意志の力を賛美します。また、神の公義と愛において、公義は無視して、ただ、神の愛だけを強調する極端に片寄せます。

③ 審判の本質は呪いです。呪いと言うのは、神の恵みから排除され、滅びに至ることを意味します。神は律法に記されているのに持続的に守らない時、呪いがあることを宣言なさいました（申 27:26、ガラテヤ 3:10）。罪に対する審判は、疑いの余地なく確かであると御言葉は語っています（ガラテヤ 6:7、詩 50:21、ヘブル 9:27）。

聖書には、人間に向けられる神の審判についての警告が記されています。アダムとエバ（創 3:16-19）、カイン（創 4:11-12、ユダ 1:11）、荒野でのイスラエルの民（出 32:28、I コリント 10:5-6）、コラの反逆（民 16:31-33）、アカン（ヨシュア 7:25-26）、サウル（I サムエル 15:26, 31:4）、アナニヤ、サツピラ（使徒 5:5, 10）等に対する審判を例としてあげることができます。神の審判の中、最後の審判の予表として洪水の裁き（創 7:23）があって、ソドムとゴモラに対する審判（創 19:24-25）、パロとエジプトに対する審判（出 14:27、ロマ 9:17）、エルサレムに対する審判（マタイ 24 章）があります。

④ 神の公正な審判を悟ることは、キリストに身を避け、キリストにあって義を得るためには必ず必要なことです。それゆえ私たちが罪を悟ると同時に、神の厳重な審判を認識することは必須的です。しかしこの時、自分の心を頑なにする場合もあります。主がアハズ王を悩ました時、アハズ王は、主なる神にさらに罪を犯しました（II 歴代 28:22）。彼は悔い改めを拒否し、神に立ち返ることを拒絶しました。

このように神の審判を悟る時、有効な恵みは、心が低くなり赦しと恵みを求めるようにさせます。しかし一方では、神の審判を悟りながらも、自分自ら、偽りの慰めをする場合もあります。神の御言葉を通して厳重な警告を聞いても、自分は神の審判を受けないだろうという自らの幻想の中に陥ることです（申

29:19)。このような人は悔い改めたのではなく、自分の罪悪から離れることもしていないのです。神はこのような者たちに対する怒りを発すると確かに語っています（ゼパニヤ 2:2）。それゆえ自分自身を徹底して点検するのが必要です（ゼパニヤ 2:1、エレミヤ 2:19, 23）。

質問 11. しかし、神は憐れみ深い方ではありませんか。

答え I 確かに神は憐れみ深い方です。⁰¹しかし、一方では、公義の方でもあります。⁰³ですから神の公義は、一番、至高の威厳に対する神に対抗して犯した罪については、体と魂が永遠の審判を受けなければならないことを要求しています。⁰³

① 悔い改めない罪人は、神の厳重な恐ろしい審判について不平を言います（創 4:13）。そう言いながら彼らは、神は憐れみ深い方なのに、どうして審判なさるのかと反問します。このような質問と反問する者たちは、まだ神の属性について正しく理解していないでいる状態です。神はまことに憐れみ深い方です。しかし、ご自身の正義を放棄しながら憐れみを移行なさる方ではありません。従って私たちは、神の慈悲がどのような方式で実行されるのかについて理解しなければなりません。

② 神は、罪に対して一時的に、そして永遠に審判なさいます。この時、神は憐れみ深い方だと言うのを根拠にして、神の審判について反対することもできます。神は、しかも悪人にも憐れみを施します（ルカ 6:35）。

01 出エジプト 20:6、34:6-7、詩 103:8-9.

02 出 20:5, 34:7、申 7:9-11、詩 5:4-6、ヘブル 10:30-31.

03 マタイ 25:45-46.

勿論、神は、選ばれた者には、特別な救いの恩恵を施すことによってご自身の慈悲を実行されます（エペソ 2:4-5）。しかし、まだ、新生していない自然な人たちは、神の憐れみについて間違った概念を持っています。ただ、理性的な概念だけで、神の憐れみだけを強調して、神の公義は無視します。さらに自然の人は、罪の重さと深刻性についてまだ悟っていないのです。従って、神の審判について余りにも厳しいと不平を言うこともできます。しかし、罪は小さな問題ではないです。すべての罪は、一番、至高な神の御心に反対するすべての行動です。罪は、王の王である神に背くことだから（出 5:2、詩 2:3-4、ルカ 19:14）決して観過できないことです。

③ 神は、憐れみ深くありながら公義の方です。これは、神の属性の中で一つであり、決して除外されないものです。神の公義は、罪は必ず罰せられることを要求するのです。しかし、神の憐れみが公義をなしに、無効化させられないのです。それゆえ、神の公義と憐れみはいっしょに連結されています（出 34:6-7、詩 111:3, 4, 116:5）。

つまり、神の慈悲と公義は互いに衝突したり、矛盾されません（詩 11:7、II テモテ 2:13）。むしろ神の慈悲と公義はいっしょに行きます。そして、各々自己の方式と時をもって現わします（出 34:6-7、II テサロニケ 1:5-10、ロマ 11:22）。たとえば、神は人を洪水によって審判されたけど、その中から、ノアの 8 人家族は救いを経験させたのでした。

④ 神は、感謝しない者と悪人にも、しかも、憐れみを施すと言っても、罪を処罰しない訳ではありません。神の一般的憐れみが、永遠の審判を免除してくれるわけではありません。このような憐れみは、神の善であることを証しし、罪人を悔い改めに招待するのです（II ペテロ 3:9）。それで彼らに、弁明できなくさせます（ロマ 1:19-20, 2:4-5）、もし、神が罪に対して審判をなさらないで、そのまま放置するなら、人間たちは神を恐れることもなく、神を蔑視するでしょう（詩 50:21、イザヤ 57:11、エゼキエル 33:28-33、ガラテヤ 6:7）。

⑤ 神は、選んだ民には、特別な慈悲を施します。キリストによって施す慈悲は、神の公義を満足させるためです（イザヤ 53:4-5、ロマ 3:25-26）。悔い改めない者たちが、神の憐れみについて言及するのは、神の憐れみの属性を、まだ正しく理解していないから言う言葉です。自分の考えで、自己方式で神を作り出しただけです。

ところが神は聖なる方です。それゆえ、神の公義に対する満足なしで罪人をそのまま受け入れることはできません。神はご自分の民に恵み契約の下で、救いの恵みを施すのは、仲介者の死によって神の公義が先に満足されたからです（ヘブル 9:15）。従って、悔い改めもない中で、神の憐れみを言及しながら、罪の放免を期待することはできないのです。罪から立ち返らなければなりません（詩 59:20）。

⑥ 従って、まことに悔い改める者は、神の審判の正しさを悟ります。そして、自分の不義を徹底して認めるようになります。神の審判について決して不平を言ったり恨んだり出来なくなります。十字架の上で救いを受けた強盗は、このような霊的状态の中にいたのです（ルカ 23:40-41）。

このような人は、神の審判が、自分の罪より重過ぎると抗議したりもしません。そして、自分の罪を悔い改めながら、ただ、神の憐れみに訴えます。また、神が自分を悲惨な状態から救い出してくださることを切に涙ながら求めます。このように悔い改める時、自分の罪がどれほど大きいのか、どれほど神に敵対したのかを悟るようになります。それゆえ神の公義と、それに伴う神の審判を悟る以前には、神の慈悲は悟ることはできないのです。